

国際研究戦略の策定をめぐる第8回農林水産技術会議における議論
(平成20年1月15日(火))

三輪会長 平成15年に農林水産技術会議が作成した「国際農業研究の推進方針」を近年の国際農業研究をとりまく諸状況の変化に対応して改定することにあっている。今回から3回の当会議においてそのための議論を行いたい。

須賀国際研究課長 国際農業研究を取り巻く要因の近年における変化をどう認識するかが、新方針の基本になる。議論の広がりポイントを考える上での手掛かりとするため、あえて整理をせずに、近年の変化を次の5点に分けて列記してみた。

1点目としては食料・農業の情勢変化であるが、途上国を中心とした食糧需要の増加、食料とエネルギーの競争、穀物市場と金融市場のリンクなどの国際的な食料・農業の情勢変化、食の安全・安心への関心の高まりがある。

2点目としては、地球温暖化問題の深刻化がある。

3点目としては国際協力・国際共同研究をめぐる情勢の変化であるが、国際貢献至上主義から国益重視への我が国の国際協力のスタンスの変化、ブーメラン効果に加え我が国の輸出促進政策との調整、貧困・飢餓撲滅とアフリカへの配慮についてのさらなる必要性の認識、CGIAR(国際農業研究協議グループ)等の国際農業研究機関を巡る情勢の変化がある。

4点目としては技術的情勢の変化であるが、遺伝子組換え実用性増大・応用可能性拡充、知的財産権の重要性の高まりと途上国の濫用がある。

5点目としては地域別の情勢の変化であるが、BRICsの経済的台頭、アジアや南米が国際協力の関係から共同研究の関係への変化している一方アフリカは以前国際協力の必要性が大きくなっている。

三輪会長 現状認識というのは非常に大切であり、ここが出発点となるので、今の説明を手掛かりに情勢変化の捉え方について、広く、自由にご議論いただきたい。

A委員 ①我が国の国際研究戦略を進める上でCGIARは重要であるが、国際共同研究のうち、何をCGIARで行うかを決めて農林水産省として予算等の措置をとる必要がある。また、人的貢献を進める必要があり、若手研究者をCGIARで経験させることは有意義。②国際共同研究の観点は国際貢献も重要であり国益重視を全てにはしない方がよい。③日本と開発途上国の間だけでなく開発途上国同士のコラボレーションを日本が仕掛けていくことも重要である。

B委員 国益重視の観点は明確にすべきである。そうでないと目的が曖昧になってしまう。アメリカはこの点については明確である。研究には国境はないが、どの研究テーマを優先させるかは国益を考慮すべきである。

三輪会長 何を国益ととらえるかということで議論がある。熱帯農業研究センターが創設されたときは、わが国の研究のフィールドを熱帯・亜熱帯に拡大するという研究面での国益と輸入の安定化という具体的な国益が混じった観点であったが、JIRCAS発足時以降には国際社会における日本の発言力・プレゼンスの発揮というような観点で、地球温暖化対策のように人類の共通問題について先導的な役割を果たすことを中心とした国際貢献というところに国益を捉えてきたの

ではないか。今、検討の価値があるのは、さらに踏み込んだものがあるかということだ。ただ、国内農業生産へのブーメラン効果を恐れて研究協力しないというのはあまりにも狭量で、例えば、中国産の食品が危ないのであれば、安全性を高めるための研究協力をするという方向であろう。

A委員 そのような研究協力は国益にも資する。JIRCAS（国際農林水産業研究センター）が設立された時期から、共同研究のテーマ、相手国は常に国益を考えて決めてきた。敢えて国益を前面に出す必要はなく、当然のこととしてこちらが国益を判断して行うことである。特に国際的に回る文章にする場合には、表現に十分気をつけることが必要である。

B委員 国際共同研究を進めるにあたって地域の文化や歴史に根ざした協力を行うことが重要。アフリカで今まで食べていなかったパンや米などを普及させたのは間違い。

三輪会長 それぞれの国の農業が自立できる計画である必要がある。

A委員 アフリカには *Oryza Glaberima* という在来種の米があり、米を食べる文化は既に存在していた。ネリカ米などはヨーロッパの米を輸入していたのをアフリカの中で代替できるようにしたものであり、ちゃんとした将来ビジョンを持ったものなら米でもよいと思う。

三輪会長 IRRI（国際稲研究所）が開発した IR8 というイネの品種も多肥や水の大量利用を必要とするという面で同じような批判があった。

C委員 中国の土壌は窒素・農薬過多であり、インドでも塩類過多である。農地に対する負荷が高まっている中で環境を維持することが必要である。日本が食料安全保障を確保するためにはアジア内で交流が重要である。他方、国際貢献という意味ではアフリカへの貢献が重要である。アジアとアフリカの議論は分けて進める必要がある。

A委員 J-FARD（持続的開発のための農林水産国際研究フォーラム）は JICA、農水省、大学等が個々に対応している国際研究協力の情報を一元化したもの。新しく作る戦略にはこのような情報の一元化を位置付ける必要がある。

三輪会長 他の論点はどうか。

竹谷事務局長 バイオエネルギーの実用化により、食料とエネルギーとの垣根がなくなった。また金融市場と食料市場のが資金面でリンクすることにより、金融市場に食料市場が振り回される状況もみられる。

三輪会長 それでは現状認識についての議論はこれくらいにして、引き続き飯山理事長からの JIRCAS の取組みについてご講演をお願いします。

飯山理事長

「国際貢献のための農林水産技術開発」として以下の内容について講演

1. 世界の潮流
2. JIRCAS の活動の特徴と国際連携
3. 共同研究成果の事例
4. 科学技術創造立国・科学技術外交への貢献

三輪会長 貧困対策は農業問題だけでは解決できない。加工やポストハーベストなど企業化に向けた研究はどうなっているのか。

飯山理事長 社会科学的な分野も含めて、複合的な研究をする部門の必要性は認識している。JIRCAS 内に利用・加工を研究する部門があり、食品の機能性等に配慮した研究も行っている。ただし同部門では近年はバイオマス研究を集中的に

進めているところ。

B委員 JIRCAS と JICA はどういう関係にあるのか。

飯山理事長 JICA は国の国際協力・国際支援政策を行っており、JIRCAS は国際研究機関・現地の研究機関と共同で農林水産業開発研究に携っている。

B委員 JIRCAS は一つの機関で幅広く研究を行っているとする、一つ一つの分野の密度が薄くなってしまわないか。

飯山理事長 JIRCAS の職員で十分な共同研究ができない場合は他の独法等研究機関・大学等からの参加を得てプロジェクトを実施している。

B委員 JIRCAS の強みは個別の研究というよりはコーディネート機能にあるのか。

飯山理事長 複数の研究プロジェクトの推進とそれらを統合するコーディネートを行っている。その中で現地への技術移転の実績を多く持っている。

A委員 熱帯農業研究センター時代から培ってきた相手国との信頼関係がある。途上国において共同研究を行う場合には信頼関係は非常に重要である。

三輪会長 JIRCAS から開発途上国への垂直的な技術移転ではなく、両者で対等な共同研究を行い、相互に競争相手となることについて、どう思うか。例えば、日本と韓国と中国と一緒に先端研究をやることについてはどう思うか。

B委員 基礎研究での国際協力を行うなら JIRCAS を通さず直接研究者同士で進めた方が都合がよい。

三輪会長 新しく作る戦略には基礎分野の共同研究の推進も入れるべきである。

D委員 DREB などは日本の国益に合致するのか。

竹谷事務局長 世界の食糧需給がタイトになる中で、これらにより需給が緩和されれば、我が国の食料の安定供給にも資することになる。

三輪会長 バイオ燃料用としてのオイルパームが盛んになるとプランテーション化してしまい、これまでの我が国の協力で推進してきた、基本食料の生産に根ざした農業が損なわれるのではないか。

飯山理事長 オイルパームは泥炭地帯で唯一栽培可能な作物である。森林伐採後の荒廃した泥炭地は水田や森林にもできないのでオイルパームが作られている。

B委員 ①JIRCAS は最先端の研究と現地での研究が混在しておりその点の難しさはないのか。②農林水の融合研究にはどのようなものがあるか。

飯山理事長 ①例えば、DREB に関連した生物資源領域では人材の半数がラボでの研究、他の半数が IRRI 等と連携したり、諸々の地域での研究というように仕分けをし、相互に協調・補完して研究を実施している。②マングローブ林と水産資源の関係、魚・エビ等の養殖との関連などの研究を行っている。

三輪会長 時間もかなり超過したので、本日のこの件についての議論はこのくらいにして来月に回したい。

(以上)